

218. ハイブリッド方式での研究発表会

技術開発企画課長 糸川 浩紀

8月17日～19日に第58回下水道研究発表会が大阪で開催されました。新型コロナウイルスにより、昨年度は発表会自体が中止となりましたが、本年度は会場とリモート（ライブ配信）の双方で発表/聴講を行う「ハイブリッド方式」での開催となりました。

私は全面リモートでの研究発表会（学会）は経験がありましたが、ハイブリッドで発表するのは初めてでした。発表の日だけ（日帰り）現地へ出張し、その他の日はリモートで聴講、という参加の仕方でしたが、いろいろと興味深いところがありましたので、今回はその雑記を「よもやま話」とさせていただきます。

【口頭発表（現地）】

会場へのエレベータを降りて受付へ。う～ん、人が少ない…。以前から、下水道展と比べて研究発表会の方は落ち着いた雰囲気がありましたが、さすがに少ないなあ、という印象です。運営側の人の数の方が全然多いという…。

で、発表者は「セッション開始15分前には会場へ」とか言われていたので、時間通りにフラフラと発表部屋へ行ってみると…、誰もおらんやん。一番乗りでした…。その後、開始時刻辺りには10人強くらい集まってましたが、寂しい感は拭えないですね。結局、私が発表したセッションは、座長がリモート、発表者も3分の2がリモート、という感じでした。他に参加したセッションを見ても、座長を含めてリモート参加の方が予想以上に多い、という印象です。

というわけで、少し寂しい思いをしながらも何とかテンションを上げて10分間の発表です。私はプレゼン中は会場の何人かに狙いを定めて（基本、下を向いてないヒト）、順繰りにその人達を見ながら喋るようにしていますが、結果、おんなじヒトばかり見つめて喋る羽目に…（やでしょうね、その方からすれば）。演題のPCには自分のスライドしか映っていない訳ですが、よくTVで観るみたいに、参加者がズラリと並ぶ画面が見られれば（全員が顔出ししてなくてもよいので）、もう少し異なるテンションで喋れたかも、というのは後になって感じたことです。

続く質疑応答では、今回のルールとして、会場→リモートの順で質疑の優先権があるのですが、幸いどちらからも質問を頂き、嬉しい限りでした。ただ、リモートからの質問は、ウェビナーでよくあるチャット形式で、それを座長が紹介する、という形でしたので、回答も一方的に喋る感じになってしまい、「果たして自分は的を得た回答をしているのかしらん？」と気になって仕方なく。お決まりの「回答になってますでしょうか…？」とか言ってみても、相手の反応が見えるわけでもなく。ふだん、対面での質疑応答において、如何に相手の表情を伺って手応えを探りながら喋っているか、という点を実感しました。あと、座

長さん曰く「他にもリモートで多数の質問を頂いてますがお時間が～」だったのですが、結局、時間切れとなった質問/コメントを発表者が知ることが出来なかったのがとても残念です（演台を降りながら、会場係のヒトに「後で送ってもらえませんかね～？」と訊いてみましたが、「デキマセン」ときっぱり）。リモートの発表者にはチャット画面が見えていたと思いますが、会場でも見られればよかったですね。座長の手間も省けますし。

ちなみに質疑応答ですが、他のセッションも含めて全体的に例年より多かったと思います。下水道研究発表会は、普通の(?)学会と比べて質問やコメントが少ない傾向にあり、座長と発表者の対話が続く、という光景がしばしば見られたものですが、今回は、リモート側からの質問を紹介し切れない、というケースが多くありました。会場で手を挙げる→マイクをゲット（もしくはマイクまで歩く）→多くの聴講者の前で質問を繰り広げる、という億劫さに比べると、チャットでの質問は圧倒的に敷居が低い、というのは理解できる話です。あと、5分間でこなされた質問の数も多かったと思います。リモートのチャット質問では、ダラダラと質問だかコメントだか解らない話が繰り広げられるようなことが無いので（笑）。

【聴講（リモート）】

発表の日以外は、在宅勤務中の自宅にてリモートで聴講しました。...結果、とても楽チンです。今回に限った話ではありませんが、何せ、会場の椅子に畏まって座っている必要が無く、集中するのも流して内職するのも自由自在、セッション間の掛け持ちも一瞬、という状態ですので。発表時間の大半は、スライドと発表者の音声だけで聴くことになりませんが、目の前にPC画面があるので、「前の席のヒト、座高たけ～な...」とかなることもなく（そもそも、通常の会場での発表においても、発表者のお顔など、ろくすっぽ見てないですし）。

一方、質疑については、前述の通りチャット画面でテキストにより放り込むことにはなりますが、こっちはなかなか大変でした。私は、「なるほど」と思った発表に対しては漏れなく質問やコメントを~~投げつける~~差し上げることにしていますが（勿論、発表者への賛辞として）、今回は会場優先、且つリモートの質問者が多い（たぶん）ということで、結構、空振りが出てしまいました。目の前のチャット画面に自分の空振り質問が溜まっていく、というのは、なかなか哀しいもので…。「読んでくだされええ」と座長に念を送ったりしてましたが、そのうち、スピード勝負であるとの認識に至り、発表が終わる前にとっと質問を発信してしまうようになりました。発表が終盤に差し掛かると、発表そっちのけでキーボードを叩きまくっているという…。

あと、物足りなかったのは、質疑応答が1往復で終わってしまいがち、という点でしょうか。何度か、発表者の回答に対して打ち返しの確認質問やコメントを発射してみましたが、なかなか読んでもらえず、よっぽど質疑が過疎らない限りは「議論」するのは難しいかなあ、と。リモートからの質疑もチャットではなく対話にしまえば、もっと盛り上

がるような気もしますが、そうすると今度は質問者が減ってしまうかも知れませんね。

いろいろ書きましたが、やはり口頭発表は、相手の存在（必ずしも「顔」でなくても）が見えている方が、テンションが上がって気持ちがよい、という点を実感です。一方、聴講についてはリモートの利点も大きいので、今後のアフターコロナ社会においても、今回のようなハイブリッドの形態は残ってほしいなあ、と思います。あとは、研究発表会としては、質疑応答のやり方ですね。何とか、双方向のリアルタイムでのやり取りが出来れば○です。

最後となり恐縮ですが、本稿のような経験ができたのも、ひとえに大変な状況の中で研究発表会を開催して下さった主催者さんのおかげです。関係各位に深く感謝申し上げます。

※今回の研究発表会にて JS 技術戦略部の職員が発表に使ったプレゼン資料（8 件）を、JS の HP にて掲載してあります。是非、ご覧下さい（日の目を見なかった昨年度のやつも、同じページにあります）。

<https://www.jswa.go.jp/g/g01/g4seika/g4seika.html>